
薪となった不死

洗剤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薪となつた不死

【Nコード】

N7918Y

【作者名】

洗剤

【あらすじ】

不死として蔑まれ、北の不死院に送られた彼の旅は終わった。しかし、それで終わりではなかった。

一つの終わり

薄暗い空の下、表面が一度高熱で溶けて固まったような地面。その上に立つ一人の人間。その風貌は、アストラの上級騎士が使う鎧で身を固め、左手には紋章の描かれた青い盾を、右手には同じアストラの地で鍛えられたロングソードが握られている。その風貌は、まさしく騎士だ。

岩の広間に立つ彼の目の前には、人間よりも一回り大きい人間が冷たい岩の地面の上に大の字になって倒れており、その身なりはどこかの王族のように立派なものだ。しかし、その肌はミイラのように干からびており、目があるべき場所は吸い込まれるような暗闇がはまっている。

王はうめくように人の言葉を一度だけ出し、ピクリとも動かなくなつた。

「■■■■■■■■■■」

そして、騎士がそれに答えるように何かを言った途端、その王の体は緑の粒子となって空気に溶けるように消えた。騎士はそれを当然のように見守り、剣を納めると、王のいた場所から握り拳ほどのソウルを拾い上げると懐にしまった。

騎士は数秒ほど鉛色の空を仰いだ後、何かを振り切ったように歩き出す。その先には、歪な形をした一本の剣が、今にも消えそうな種火を包む藁の塊に突き刺さっている。

それが何か知っている様子の騎士は、そこへ辿り着くなり右手をその剣の柄の先にかざし、動きを止めた。

「■■■■■■■■■■」

騎士は先ほど倒した王の名を、そしてかの王を安心させるような言葉を口にした。

それと同時に、種火が燃え上がり、同様に騎士の右手にも炎が燃え盛る。しかし、騎士は自分の胸の前で左手を右手の炎の中に入れ、それを燃え移らせる。

彼のソウルを、彼の人間性を、彼を人間足らしめている物を燃料にして、足元の火が急速に広がる。それと同時に彼の持ち物の一つが発光し、炎はそのままに彼だけが忽然と姿を消した。

一つの終わり（後書き）

修正を入れました

冬の城にて

立派なという言葉がとても似合う、大きな教会。そこで、一組の男女が祭壇の辺りで話していた。

「英霊を召喚するというのに、こんな単純な儀式で構わないの？」

真っ赤な両眼を除いて、真っ白というべき女性が男に問いかける。

「拍子抜けかもしれないけどね」

それに答える黒いコートを着た男は、水銀で描いていた怪しげな魔法陣を祭壇の正面に書き終えた。それに向かうようにひざまずいているが、長身だ。

「サーヴァントの召喚には、それほど大がかりな降霊は必要ないんだ。実際にサーヴァントを招き寄せるのは、聖杯だからね。僕はマスターとして、現れた英霊をこちら側の世界に繋ぎ止め、実体化できるだけの魔力を供給しさえすればいい」

男はその姿勢のまま右手で魔法陣の一部を指さし、説明する。どうやら、そこにはそれに関することが書かれているようだ。

「——いいだろう」

男は重い腰を上げるように立ち上がり、後ろに立つ女性に振り返る。

「アイリ、聖遺物を祭壇に置いてくれ。それで準備は完了だ」

その言葉に従い、魔法陣を踏まないように祭壇に裏から回り込んだ女性は、抱えていた大きな鞘を祭壇に置く。

それを見てうなずいた男は、彼女が祭壇から離れるのを確認して右手を伸ばし、一の腕には左手を添える。

「閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}閉じよ。^{みたせ}繰り返すつどに五度。ただ満たされる時を破却する」

詠唱の開始と共に魔法陣から空色の光が放たれ始め、言葉をつむぐたびにそれは強くなる。

しかし、それを当然といったように、男は平然と詠唱を続ける。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば答えよ」

更には、魔法陣からは風が吹き、彼のコートが波打つ。祭壇の近くにある燭台は倒れそうだ。その光景を、アイリと呼ばれた女性は胸に手を当てて心配そうに見守る。

「——誓いをここに。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者！」

自分は総ての善となり、悪をその下にしく。彼の信念を現したような詠唱は終わり、一層強くなった風と発光の末、白い閃光が一瞬で教会の中部を覆った。

「これは……!?!」

閃光に眩んだ目が回復した男が見たのは、青いドレスを着た華奢

な少女と、倒れ伏すフルプレートの鎧を着た騎士。その光景に、男は目を見開いた。

騎士が目を開けると、見たことのない天井が目に入った。優美な模様に立派な木材だ。アノールロンドや不死院に送られる前ぐらいにしかこの手の物を見たことのない彼だが、竜やデーモンに果ては神を殺してきた彼には美などは無価値に等しい。

上半身を起こした彼は、そこで自身が鎧を身に付けていないことに気付いて忌々しそうな顔をする。あの上級騎士の防具は彼が気に入り、原盤まで使用した秘宝級の物なのだ。かといって禪のみで動きまわる趣味の無い彼は、ベッドから立ち上がると騎士の鎧を身にまとう。彼からすれば当たり前の事だが、いきなり鎧が現れたような様は人をひどく驚かせるだろう。

鎧を着る際に肉体があるという事に気付き、召喚されたという可能性を彼は排除した。もしや召喚され、ソウル体となっていたのではないかとも思っていたのだ。

家具から推測すれば使用人が使う部屋らしき場所だったが、それでも上質な木の扉を使っている辺り、ここは城だろうかと彼は推測する。ついでに窓から外を見もしたが、雪に覆われた森だったので彼は素直にドアから出ることにした。

そして、警戒しつつもノブに手をかけた途端にドアが内側へと開かれ、彼は飛びのいて両手に絵画守りの短剣を握る。

「落ち着いてくれ。その鎧は気になるけど、君をどうしようもないと思っていないよ」

現れた黒いコートを着た男がそう言うも、彼は瞬きすらせずに短

剣を構える。ソウルを取り込みもしていないただの人間だと一目で分かった彼だが、コートに不自然なふくらみがあるのが見て取れたからだ。

そして、短剣を構えたまま彼がそれについて勘ぐるような事を言くと、男の眉が少し動いたのを彼は見た。

「君には説明しなければならぬことがある。ついて来てくれるか？」

そう言うなり背を向けた男を訝しげに見る彼だが、事態を進展させるために剣を腰に差して男の後ろを歩く。無愛想な男を見て、かなり警戒しているのか素なのか彼は考えた。

「聖杯戦争という言葉に聞き覚えは？」

歩きながら問う男に、彼はまったく無いと返す。それを聞いた男は、それ以上話すこともなく無言で歩き続けた。ただの人間が大嫌いの彼もまた、一言も話しはしなかった。

「ここだ」

大きな扉の前で立ち止まった彼は振り返る。

「僕は君の敵じゃない。くれぐれも、おかしい真似はしないでくれ」

男がそう言い切った途端、大扉が内側から開けられる。彼はそれに返答せずに、ただただ扉を睨みつける。もし相手が自分がここに来た理由を知っているのなら、解決策だけを聞いて立ち去ろうと心に決めて。

「来たか、切嗣」

偉そうな、と言いつたのが最も容易で適切な声を発した老人が、二人を待っていたように大きな椅子に座していた。おまけに、白地に萌黄と黄金という趣味の悪い司祭服を着ている。しかし、彼はその翁よりも、その手前にいる青いドレスを着た少女が気になった。その少女は誰だ？と、彼は翁を無視して切嗣に聞く。しかし、彼は答えない。

「ふむ……。セイバーに気づくか。やはり、ただの兵士というわけではなさそうだ」

そう言う老人の態度がどうも好きになれない彼だが、椅子から見ておそらくはこの城の主だと判断した。

「さて、おぬしは聖杯戦争に参加しに来たわけでは無いというのは真か？」

老人のその問いに、聖杯戦争とはそもそも何か、と彼は問い返す。

「ふむ……。簡潔に言えば、願いが叶う器を奪い合う魔術師が、英霊をサーヴァントを役使して争う物だ。そして、貴様はセイバーのサーヴァントと共に呼ばれ、今ここにいる」

かなり短く説明した老人の目は、まっすぐに彼に向いている。しかし、彼はそれどころでは無かった。連れてこられたと思いきや、召喚されたというのだ。肉体があるにせよ、おそらくここは別世界だろうと彼は思い、嘆きそうになる。なんせ、自分が途中で抜けた事によって向こうでは種火がくすぶり、消えているかもしれないか

らだ。そうなれば、闇の時代が到来する。

彼は前に立つ男を突き飛ばし、老人へと歩きながらお前が俺を呼んだのかと詰め寄る。

「——止まってください」

そんな彼を阻んだのは、青いドレスを着た少女だ。荒々しくどくように言う彼を、彼女は睨む。

「マスターに、あなたが彼に近づかないようにしろと言われてます。お引きください」

しかし、彼はそれを鼻で笑うと更に近づき、だったら元の世界に戻せと言う。

「君が呼ばれたのは、我々にとっても予期できなかった。本来ならセイバーのみが呼ばれるはずだったのだからな」

つまり、自分たちが聖杯を手に入れるために行ったことで、彼がここに来たというのだ。彼はならば自分を元の世界に戻せ、強く言う。

「生憎、我々は英霊を呼ぶすべを持っていても、それと同時に召喚された者を帰すなど不可能だ」

老人は悪びれる様子もなく言う。それに憤慨した彼は老人を睨みつけて、何か手立ては、手伝うつもりは無いのか、と冷たく言った。

「私には無い」

老人の言葉に、彼はならば死ねと伝えたと絵画守りの剣をしまい、黒騎士の防具一式と盾に剣を装備して、老人へと走り出す。

「通しません!!」

彼に反応して一瞬で鎧をまとった少女は、見えない剣を両手で構えて立ちふさがる。しかし、彼はそれに盾一つ動かさず、少女へと目標を変えて走る。しかし、剣も盾も構えようとしていない。

そして、少女が両手で切りかかってきた一撃を、その盾で走りながらそらし、黒騎士の剣の柄の先を頭めがけて叩き付ける。しかし、それをそらされた勢いに体を乗せて躲した彼女は、返す剣で足を薙ごうとする。それを彼は滑ったように両足を前に放り出して避け、重力に身を任せながら彼女の頭を右手でつかみ、道連れにして倒れこむ。

もし彼女の剣がもつと取り回しやすければ、彼の腕を切り飛ばせもしたであろう。しかし、彼女の剣は両手で持つような大型だ、そんな取り回しはできない。

「クッ!」

苦しそうな声を上げる彼女と共に倒れこんだ彼は、空いた左腕で剣を右手のみで持つ形となった彼女の右手を包み込みながら、馬乗りになる。そして、彼はためらいもなく、彼女の頭を大理石らしき床に思いっきり打ち付けた。

しかし、彼女は傷一つ無く、彼は目を見開く。普通ならばこれで死んでいるはずなのだ。

「悪いが、神秘の無い攻撃は効かない」

顔をつかまれたままそう言う少女に、彼はそうかと一言言って立

ち上がると彼女を軽々と正面に投げ、ある大剣を手にする。そして、彼は一言、これなら効くだろうと笑みを浮かべて言った。

アルトリウスの大剣。折れた直剣を大きな楔石の欠片で強化し、それを神の鍛冶屋である巨人が大狼シフのソウルを籠めるように鍛えた大剣。さらに、彼はそれに光る楔石を使用してさらに性能を上げていた。

「馬鹿な！？それは、その剣は……！！」

どうした事か、その剣を見た途端に少女は驚愕に目を見開き、大声を上げる。気のせいか、老人も驚いていたようだった。それを彼は冷たい目で一瞥すると、大剣を両手で握って構えつつ、狼の指輪を嵌めた。

「待ってくれ！！」

そして、彼が彼女を切り捨てるために走りだそうと腰を落とした瞬間、彼の背後から男の声がかかる。

「君を元の場所に戻す方法がある！」

自身を持つていう男の言葉に、彼は勢いよく振り返った。

「聖杯戦争が終われば英霊は元いた場所に還る。ならば、君が元いた場所に帰れるのも道理だろう？一〇〇％とは言えないが、一番望みがあるはずだ！」

それを聞いた彼は、用済みも同然の彼を殺すために歩きだす。上級騎士の装備は、城を燃やせば焼け跡から見つかるだろうという心積もりだ。彼の背後で少女が動こうとした瞬間、彼は先ほどまで無

かったある物を床に見つけ、足を止めた。

橙の助言ろう石によって書かれた、別世界の自分からのメッセージである。それを読もうと彼はしゃがみ、手を添えた。攻撃するな という短いメッセージだったが、この城で最初に見つけた物なのでせつかくだから信じてみようと、立ち合がると、終わるまで自分は何をすべきか、して欲しいか、と聞いた。

「できることなら、その力を貸してほしい。……その代わり、君には衣食住やその他の必要な物を支援すると約束しよう」

その言葉に少女が何かを言ったが、彼は男を見ながら口元を歪め、乗ってやる、と愉快そうに言ってメッセージを評価した。

冬の城にて（後書き）

彼のセリフが出ないのは仕様ですが、試験的な物なので何かあれば感想欄にお願いします。

無限所持重量と早着替えは標準装備です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7918y/>

薪となった不死

2011年11月27日15時49分発行